

五色の花の咲く桜

この文殊寺には珍しいものがたくさんありました。

大きな椎の木が十本ばかりあって、これには椎茸がたくさんできました。この椎茸は非常に香りが強いもので、不思議なことに笠の上はまつ黒、裏は軸まで真っ白でした。

また、ここには橋の木もありました。生椎茸が採れるのも、橋の木があるのも佐倉付近ではここだけでした。

さて、この寺の客殿の前には丸い塚があつて、その上には何と三抱えもある桜の木がありました。

この桜は、鎌倉権五郎のさした鞭から生えた桜のひこばえであるといわれています。大きさは、地面から最初の枝まで二間（三・六メートル）もあり、そして、八方へ枝が伸び下っていて、その姿は半円形をしていました。高さは、十間（一八メートル）もあり、花弁は八重、一重、三重の大輪で、花の色は濃淡を交えてたいそう美しいものでした。

世間の桜が終わったころ、ようやく咲くのですが、遠目には、そばの松林よりもはるかに高く、山のように白く見えたといいます。

花の盛りには、虻がすさまじいほど来て、花の蜜を吸って辺りを飛び回り、その音はまるで千部のお経を読むようでした。

このため、佐倉はもとより上総や銚子などからもたくさんの人々が花見に来るのです。しかし、江戸か京か大阪にあるならば日本中に知れわたるほどの名木なのに、このような田舎にあつて毎年咲き散ってしまうのは、大変惜しいことだと書物には書きしるされています。

※ 文殊寺は、本佐倉五良にあり、中世には佐倉五か寺のひとつに数えられた大寺でした。

しかし、天保四年（一八三三）、大風で大破して廃寺となつてしまいました。それ以後、この管理は本佐倉の吉祥寺に引き継がれました。

文殊寺の本尊仏、木造十一面観音立像葉、室町時代初期のものとして、現在も吉祥寺に保管されています。この像は、全体の調和がとれた、一本造りの秀作で、昭和四十六年に町の指定文化財となっています。